

C-58 女子大学生の着衣状態について(第5報)
神戸大教育 稲垣和子

目的 衣生活の実態は近年相当変遷し、戦前との様相には大差がみられる。そこで着衣状態の実情を把握し、国民健康増進をはかる爲に役立てたい希望からこの調査をおこなった。主として被服社会学の立場から、前報までに平常着、外出着、作業着、及び寝具寝衣につき検討してきたが、今回は更に雨着に関して全様の検討を加え、若干の成績を得たので報告する。

方法 調査は京阪神に居住する女子大学生146名について、一年間にわたり毎月調査用紙を配布し、記入せしめ、前回全様タナックカードを利用して調査結果を整理した。

結果 一年間を通じて、雨衣の重量には大差は認められないが、冬季には防寒用オーバーで雨衣の兼用とする場合も若干みられる。月別寒暑感覚は、第1報の普通衣服の場合の寒暑感覚に比し、春秋を除いて若干寒さを感じ、その差は夏季より冬季の方が大である。又、体格との関係も、第2報の普通衣服の場合と類似の結果が出た。その他、衿明きの状態、袖丈の長短などについて、平常着、外出着、作業着における季節との関係についても若干の知見を得たので報告する。